〈海外学会報告〉

Humboldt-Kolleg

Probleme der Vernunft. Kant im Kontext – Problems of Reason. Kant in Context

フェラーラ　2022年５月30日～６月１日

山蔦　真之

今回報告をするのはフンボルト奨学金でも知られるアレクサンダー・フォン・フンボルト財団の支援により、イタリアはフェラーラ大学の主催によって行われたシンポジウムである。「理性の問題」と題された本シンポジウムは３日間にわたり、20数名の提題者から「カントにおける理性の問題」という幅広い主題で、とはいえ実際には個々の研究者の自由なテーマ設定によって発表が行われた。シンポジウムの発起人となったのはフェラーラ大学教授のアントニーノ・ファルドゥート氏で、今回のシンポジウムは氏がかつてマインツ大学にて師事していたハイナー・クレンメ教授の60歳の記念という意味合いも持っていたとのことである。

シンポジウムにおけるそれぞれの発表は歴史的、あるいは体系的な観点において既存の研究からの新しい展開を試みた意欲的なものからそうでないものまで様々であったが、ここでは基調講演としてなされたハイナー・クレンメとポール・ガイヤーからの提題について付言しておきたい。クレンメの「危機における批判――カント、フッサール、フーコーにおける合理性」はフッサールとフーコーにおける理性の問題をカント的な観点から見直したもの、ガイヤーの「カントにおける理性と経験――一石二鳥を目指すか折り合いを付けるか」はカント哲学の様々な領域に共通する理性の問題を論じたものであった。両研究者はこれまで体系的なカント研究を数多く残してきたのであり、その業績はそれぞれ今日の独語圏と英語圏を代表するものとすら評価できるだろう。今回の両者の試み、カント哲学の外に出て他の哲学者とカントの比較をするのか、それともカント哲学の中にとどまりつつカント哲学の諸領域を横断するのかは、長い研究史を経て高度に細分化された今日のカント研究が今後向かうことのできる二つの未来と言えるかもしれない。なおシンポジウムでの諸発表はそれぞれの発表者が改稿した形で、2023年秋に論集 *Problems of Reason: Kant in Context* (Antonino Falduto ed. *Kantstudien-Ergänzungshefte*. de Gruyter) として出版されることが予定されている。

さて今回の報告にあっては、感染症 COVID-19が学会活動にもたらした影響について触れないわけにはいかないだろう。本シンポジウムが開催された2022年５、６月は全世界的に見てもまださまざまな規制が設けられていた時期であった。たとえば日本やアメリカは海外渡航に関しての規制が比較的厳しく、著者も含め幾人かの参加者はシンポジウムの開催中に帰国のための検査を受ける必要があった。しかしとりわけ制限の厳しかったのは中国で、復旦大学からの参加者である Kang Qian 氏はオンラインでの発表を余儀なくされていた。この数年でオンラインでの学会発表はかなり機会の増えたことと思われるが、しかしオンラインと対面の混合は未だかなりの困難の伴う形式であったと言わざるを得ない。

本稿を書いている2023年３月、感染症をめぐる規制は当時に比べかなり緩和され、短期的には国内外の学会は感染症以前の形態に戻っていくことが予想される。とはいえ感染症をめぐるこの

数年の経緯を一過性のものと捉えるか、あるいはそれがより大きな問題をつきつけたと捉えるかは我々にかかっているとも言える。今後新たな感染症、あるいは国際情勢の変化によって、国外での学会の開催・参加に再び困難が生じることは予想されるだろう（実際、2024年カント生誕300年に合わせケーニヒスベルク（現ロシア、カリーニングラード）で開催が予定されていた国際カント学会は、ロシアのウクライナ侵攻を非難する形でボンでの開催に変更がなされた）[1]。また、そのような困難にも拘らず国際学会を開催することの意義があらためて問われていると言うこともできるだろう。学術活動を通じた海外との交流は国際化の理想的な側面であり、それはカント哲学の言う世界市民を体現しているようにも思える。しかし世界市民の理想はそのような美しい側面だけを持っているわけではないこと、そこにはグローバリゼーションの名の下の経済的な収奪や、それに伴う劇的な環境の変化がついてまわること、今回のパンデミックがつきつけたのはそのような現実ではないか。世界市民の理想にはそのような現実があることを見た上で、それでもなお学術的な国際交流と、さらには世界市民の理想を追求するのか、パンデミックの渦中において行われた本学会はそのような問いかけも持っていたように感じられる。

1　カント協会(Kant Gesellschaft)のホームページ参照。http://www.kant-gesellschaft.de/de/kg/mitteilungen.html (2023年3月23日アクセス確認)